

リヒテルのプラハ・ライヴを聴く

06.Apr.2025 金古 尚

20 世紀を代表するピアニストの 1 人、スヴァトスラフ・リヒテルは、まだ西側諸国では充分知られる前の 1956 年からプラハで定期的に演奏会を行っていたが、その様子はプラハ国営放送局で録音・保管されていた。その録音は 1956 年から 1988 年までの長期に及んでいる。今日はその中から幾つかを皆さんと聴いてみたいと思う。

(使用 CD は全てハルモニア・ムンディ)

スヴァトスラフ・リヒテル (1915.3.20 --- 1997.8.1)

ウクライナ生まれ。父はピアニストでオルガン奏者だった。1937 年、モスクワでネイガウスに師事。1945 年ソヴィエト音楽コンクールで優勝し、活動を活発化する。以後、ソヴィエト、東欧の演奏活動の後、幻のピアニストと呼ばれるようになる。1960 年アメリカデビュー、演奏活動を広げる中で世界的に名声を得ようになった。初来日は 1970 年。1997 年 8 月 1 日、モスクワ郊外で 82 歳の生涯を閉じた。

ハイドン：ピアノ・ソナタ二長調 Hob.XVI-24

スヴァトスラフ・リヒテル 1985 プラハ

ハイドンはほぼ 50 曲のピアノ・ソナタを書いたと言われる。生涯を通して書かれていたと考えられるが、その半分は 1770 年代に創作されている。この作品も 1773 年作曲、ウィーンで出版されている。活気溢れる作風を持つ。第 1 楽章は転調を繰り返す中で緊迫感を増していく。第 2 楽章と第 3 楽章はそのまま入っていき、ロンド形式（同じ旋律を繰り返す）と変奏曲の形式が見られる。

シューベルト： 4つの即興曲 D.899(Op.90)より 第 4 曲

スヴァトスラフ・リヒテル 1972.9.24 プラハ

シューベルトのピアノ作品で大変な魅力を持つのは小品だと思う。確かに 20 曲に及ぶソナタの素晴らしさは言うまでもないことではあるけれども、より自由な小品の中にこそシューベルトの音楽の良さが生かされているのではないかと思う。第 4 番は下降する主題から始まり、さまざまに歌い継がれていき、第 1 部を再現して終わる。1827 年作曲。

ラフマニノフ： 練習曲「音の絵」Op.33 より 第 4 曲 第 5 曲 第 8 曲

3'15- 1'50- 2'40 スヴァトスラフ・リヒテル 1884.6.2 プラハ

スクリャービンの死後、ラフマニノフは追悼演奏会で亡き親友の作品ばかりをひいた。

その時期に練習曲集「音の絵」が書かれている。「練習曲」と「絵画」を合わせて曲集の題としてつけている。スイスの画家ベックリンの影響を受けているといわれている。

モーツァルト：ピアノ・ソナタイ短調 K.310

スヴァトスラフ・リヒテル 1956 プラハ

1778 年パリで作曲される。モーツァルトが書いた最初の短調によるピアノ・ソナタである。曲は暗い緊張の中に美しさをもつ。充実した内容を持つ作品。

ショパン：練習曲 Op.10 より 第1 曲、第2 曲、第3 曲、第12 曲

1'50- 1'10- 3'50- 2'05 スヴァトスラフ・リヒテル 1960.2.21 プラハ

1829 年から 32 年に作曲されている。フランツ・リストに献呈されている。リストはパリに出て困難な中にあったショパンを助けたという。リストの友情に対するものと、リストという大演奏家に対する敬意があったのだろうと言われる。非常な技巧を要求される曲集だが、陰鬱さや微妙な心の動きを反映する名作が並ぶ。第12 曲は祖国を出てパリに向かう途中ワルシャワへロシア軍が侵入したことを知ったショパンが悲憤のあまり書いたといわれる。最後は叩きつけるように終わる。

ショパン：バラード第1 番 8'45

スヴァトスラフ・リヒテル 1960.2.21 プラハ

ショパンは少年時代から自身が感激した物語をピアノで即興的に弾くことが好きだったという。緩やかなラルゴで始まり、最後は壮絶な勢いを見せる。リトアニアの英雄を謳った詩を題材にしたと言われている。

スクリャービン：ピアノ・ソナタ第2 番嬰ト短調 7'30- 3'25

スヴァトスラフ・リヒテル 1972.9.24 プラハ

スクリャービンは 10 曲のピアノ・ソナタを残していて、生涯にわたって書かれている。1897 年、5 年を要して作曲された。印象派を感じさせる響きを持つ。

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第23 番ヘ短調 10'13- 5'52- 7'21

スヴァトスラフ・リヒテル 1959.11.1 プラハ

ベートーヴェンはピアノを終生愛し続けた。32 曲のピアノ・ソナタは技法、内容共に獨創性に富んだ名作が並ぶ。第23 番は中期の中でも傑出した作品だと思う。激しい行き詰まるような緊迫感を持つ。熱情という名前はベートーヴェン自身のものではなく、出版社が出版の際に書き加えられたといわれている。1805 年に完成されている。